

教育研究グループ「研究結果」特別支援学校コーディネーター研究会 報告書

2015年度は5回の研究会を行い、2回の学会大会自主シンポジウムを行い、特別支援学校のセンター的機能や特別支援教育コーディネーター論について討議を行った。特に特別支援教育コーディネーターの経験が少ない参加者にとっては、自身の研修的意味合いも大きかった。レポート報告（話題提供）を受け、各特別支援学校のセンター的機能やコーディネーターの活動内容のとりくみや支援エリア内（自治体等）の情報交換も活発に行われた。最終回の第5回では、初めてワークショップ形式にも取り組んだ。

1. 第1回 特別支援学校コーディネーター研究会

【話題提供】

「特別支援学校コーディネーターへの道（その1）」（東京都立中野特別支援学校 田中雅子）

- ・ 小・中学校等への巡回相談で大切にしてきた視点
- ・ 巡回相談を始めるときの留意点で大切にしてきた視点
- ・ 巡回相談での具体的な助言内容

【参加者の感想】

- ・ 他のどんな研修会より学ぶことができる貴重な時間である。
- ・ 学校の発達段階に応じてコーディネーターの支援の内容をかえるという視点が参考になった。

2. 第2回 特別支援学校コーディネーター研究会

【話題提供】

「特別支援学校コーディネーターへの道（その2）-小・中学校等の校内研修会講師-」（東京都立中野特別支援学校 田中雅子）

- ・ 校内研修会の構成と留意点
- ・ インシデント・プロセス法について
- ・ 事例検討会の進め方

【参加者の感想】

- ・ 校内研修会のテクニックが参考になった。研修会講師をすることと学校とのパイプを太くする戦略についてもっと深めたいと思った。
- ・ 個人ではなく、ひとつの組織としてコーディネーターの仕事を考えることが大切だと感じた。

3. 第3回 特別支援学校コーディネーター研究会

【話題提供】

「こんな副籍交流やっています-八王子特別支援学校の場合-」（東京都立八王子特別支援学校 中村尚子）

- ・ 市教委との連携
- ・ 地域指定校との連携
- ・ 理解啓発出前授業について

【参加者の感想】

- ・ 副籍交流の目的や通常の学校での出前授業で求められることがわかった。
- ・ 似たようなケースがありそうで、かつ成功体験としての共有話題から漏れそうな内容を提供してくださったことは、大変すばらしいと思う。この会ならでは、かと思った。

4. 第4回 特別支援学校コーディネーター研究会

【話題提供】

「関係者会議への、コーディネーターとしての望ましい関わり方って・・・？」（東京都立あきる野学園 野濱美輝江）

- ・ 望ましい関係者会議？
- ・ コーディネーターとしてのかかわり方

【参加者の感想】

- ・ 他の学校では、どのような取組をしているのかを知ることができてよかった。
- ・ 関わりが薄い保護者とつながるためにはどうしたらよいか？ 一番難しい問題であり、その実践を積み上げる価値が高いと思う。

5. 第5回 特別支援学校コーディネーター研究会

【内容】

ワークショップ「特別支援学校のコーディネーターは、こうでないと！」（ファシリテーター：東京都立中野特別支援学校 田中雅子）

- ・ ワークショップ形式で、これからの特別支援学校の特別支援教育コーディネーターのあり方（コーディネーター像）を明らかにした。
- ・ ①「シャベリカ」を使った自己紹介
- ・ ②アイスブレイク（グループに分かれて「共通点グランドスラム」）
- ・ ③ワーク1「魅力あるコーディネーターってどんな人？」（アイデアの発散とアイデアの共有）
- ・ ④ワーク2「魅力あるコーディネーターになるには、どうしたらいい？」（アイデアの発散とアイデアの共有）
- ・ ⑤振り返り

【参加者の感想】

- ・ めざすコーディネーター像は、いろいろだされたが、根本は心と身体が健康でたくましいこと。そのために自分をみがき大切にすることが大事ということが印象に残った。
- ・ 先生方と意見を共有したことを活かして、学校で積極的に動きたいと思った。子どもの授業にも生かしたい。
- ・ 初対面の方たちとでも自分の意見を伝えやすいし、短時間でたくさんのアイデアが得られた。常に頭をフル回転させていた。

6. 日本発達障害学会第50回研究大会 自主シンポジウム

【内容】（詳細は、別紙2）

「東京都における特別支援学校のセンター的機能の現状と課題－10年間の実践を振り返る－」

企画者：田中雅子（東京都立中野特別支援学校）

司会者：奥住秀之（東京学芸大学）

話題提供者：中村尚子（東京都立八王子特別支援学校）、田上美恵子（東京都立府中けやきの森学園）

指定討論者：森下由規子（明星大学）

7. 日本特殊教育学会第53回大会 自主シンポジウム

【内容】（詳細は、別紙3）

「特別支援学校の「センター的機能」の現状と課題（4）」－「センター的機能」の目標（ゴール）と評価を考えるⅡ－

企画者：田中雅子（東京都立中野特別支援学校）

司会者：奥住秀之（東京学芸大学）

話題提供者：山中ともえ（東京都調布市立調和小学校）、鈴木龍也（福島県教育委員会）

指定討論者：滝坂信一（元帝京科学大学）

東京都における特別支援学校のセンター的機能の現状と課題

—10年間の実践を振り返る—

企画者：田中雅子（東京都立中野特別支援学校）
 司会者：奥住秀之（東京学芸大学）
 話題提供者：中村尚子（東京都立八王子特別支援学校）
 田上美恵子（東京都立府中けやきの森学園）
 指定討論者：森下由規子（明星大学）

KEY WORDS: 特別支援学校, センター的機能, 特別支援教育コーディネーター

【企画趣旨】

「センター的機能を主として担当する分掌・組織を設けている」特別支援学校は9割を超えており（文部科学省，2012），特別支援学校ではセンター的機能を当然の役割として取り組んでいる。さらに、「インクルーシブ教育システム構築のために特別支援学校のセンター的機能を一層活用し，かつセンター的機能そのものに重要な役割を果たす」（中央教育審議会，2010；中央教育審議会，2012）とあり，センター的機能に対するさらなる期待が寄せられている。

東京都における特別支援学校のセンター的機能に関しては，「これからの東京都の特別支援教育の在り方について（最終報告）」（2003）に「小・中学校等への教育的支援を積極的にいき，地域の特別支援教育のセンターとしての役割を担っていく必要がある。」とあり，2004年には，「エリア・ネットワーク構想」が示めされた（東京都特別支援教育推進計画第一次実施計画）。都立特別支援学校のセンター的機能の具体的な取組に関しては，「特別支援教育体制推進事業（2004～2006年）」，「センターモデル事業（2006）」等での実践的研究を経て，現在，各学校において，その充実が図られている（田中ら，2013）。

そこで本自主シンポジウムでは，東京都における特別支援学校のセンター的機能の10年間の取組を総括したい。特別支援学校の特別支援教育コーディネーター（以下，コーディネーター）が実践しているセンター的機能の取組を紹介し，現状を総括する中で，今，何が課題となっているのか，その課題を解決するためにしなければならないことは何か，を明らかにする。今後の東京都立特別支援学校のセンター的機能のあり方について議論したい。

【話題提供者の要旨】

1) 東京都立八王子特別支援学校のセンター的機能の実践

（中村尚子）

本校のセンター的機能の今年度の重点項目は，巡回相談，出張幼児教室，いろいろな形の連携の3点である。

巡回相談では，ケース相談形式が多く，支援の必要な幼児を多く受け入れる幼稚園・保育園からの依頼が多い。特定の園からの相談が積み重ねられている一方，その園内でのスキルの定着に関しては，成果が明らかにできていない。また，特別支援学級を対象とした巡回相談にも協力しているが，より有効な巡回相談機能を市教委との連携の中で打ち出していく必要を感じている。

出張幼児教室は，ある幼稚園と連携し，支援を必要とする園児を集めてコーディネーターがミニ授業を行う取り組みである。これは2013年度から始まり，昨年度は1園で年間8回実施した。幼児・保護者・園それぞれへのアプローチにおいて成果があったことから，今年度は1園での継続実施と同時に，他の園での試行を積極的に進める予定である。

いろいろな形の連携は，ニーズに応じた“連携のカスタマイズ”を指している。広域かつ学校数が多い八王子市においては，各校が抱える特別支援教育に関するニーズは多様である。例え

ば，昨年度は「中学校校内員会への年間を通じた参加」「小学校通常学級における理解啓発授業の共同実施」「支援が必要な児童を含む通常学級の授業研究への参加」等を実施した。今年度も各連携先のニーズを見極め，その形をこちらから提案する姿勢が有効だと考えている。

2) 知肢併置校におけるセンター的機能の取り組み

（田上美恵子）

昨年度は巡回相談として18校46回の相談があったが，ほとんどが発達障害及びそれに近い特性をもつ児童・生徒が対象であった。地域の学校には肢体不自由の子どもたちも在籍しているが，年に1,2件しか相談がない。学校生活に支障を感じている子どもたちもいるが，この問題は十分把握されていないのが現状である。

巡回相談において求められることが，子どもへの関わり方や授業への助言ではなく，子どもの見立てであることも多い。専門家から，学校での問題は子どもの特性に依るとする意見ももらうことで，指導力の問題ではなかったという安心を得たいという小・中学校の思いが感じられる。

今後は個別の巡回相談だけでなく，学級にいる子どもたち一人ひとりが，自己肯定感を高めていけるようなユニバーサルデザインの授業について啓発していくことが，多様な子どもたちのニーズに対応する有効な手だてであると考えている。

【指定討論者の要旨】

（森下由規子）

近年「特別支援教育」という文言は学校現場に定着し，支援が必要な子どもに気づくことのできる教員も増えている。今，現場の教員から最も期待される外部支援は，自分たちが気づいた支援が必要な子どもたちに対する具体的な支援方法に関するアドバイスである。

さらに「障害者の権利条約」を批准した日本の教育は，インクルーシブ教育システムの構築と共生社会の形成へと進化していく。いろいろな子どもたちが在籍することが当たり前になった通常の学級環境の中で，家庭環境も特性も異なる子どもたちの困難の克服のために「何を」「どのように」「どのくらい」指導・支援することが望ましいのか，少し先の姿を予想しながら質と量を考えた提案のできるコーディネーターの資質が求められている。

本シンポジウムでは，今後の特別支援学校のコーディネーターのあり方を①専門性の向上に関する視点②学校文化の違いの克服③マンパワーに頼らない学校機能としてのコーディネーターの役割という3つの視点で議論できればと考えている。

【文献】

田中雅子・奥住秀之・池田吉史(2013) 特別支援学校のセンター的機能における校内組織等に関する調査研究。SNEジャーナル，19，203-216。

(TANAKA Masako, OKUZUMI Hideyuki, NAKAMURA Naoko, TAGAMI Mieko, MORISHITA Yukiko)